

清暇録

大正十年六月上浣起筆
牧之方馬琴香閣

五

特別
イ4
1919
336



清暇録五

大正十年六月三日紀業

○坊舎に雜書を漁りて物ありし一冊二巻を漁り

一編心齋課 一冊

卅山元政上人齋中にて詩を刻す、卷首上人の
自序あり、卷尾●明人陳元斌の云句を跋
に他の、十一と詩數、陳の批評あり、後、地黃
を施し、其後、刻し、其後、支那の
し、此書分稀歟、と爲す、左より一冊を物す

華老法集

或問華老法集、余曰、不誤、華老、不佛

中貴、不漢法集、不知佛留慧

一 唐太宗屏凡書得文 一冊

之、董氏我、沈、沈、載、多、中、中、得、文、也、嘉、嘉、
永、二、年、十、島、知、是、福、山、後、の、あ、り、心、も、よ、の、
釋、文、の、あ、考、考、考、を、附、す、法、帖、に、添、く、し、珠、の、
す、へ、ま、も、の、也、版、下、知、是、の、も、也、可、二、十、年、
朱、を、加、く、し、も、あ、り、知、是、の、字、に、破、似、ま、え、
亦、と、書、る、の、花、を、も、る、

○ 海外におよびの東宮佛心に入らせり、則ち存る大統
領との交際を記念の旨を、特こゝに、お取
東宮の瑞穂の如く、お人として敬慕せしめ、或
と訪むる事、おやせとも、おあり、終、我、在

氣と名譽の良希判官たる貴國國民の敬意を表し結ばるを得由佛國の感謝之に過ぐるものなしと

東宮の御答辭

一日國際直 電巴里發

日本皇太子殿下には大統領ミラン氏の御答辭に對し御答辭を述べさせられて曰く
大統領閣下が余を迎へらるゝに當つて佛國の深厚なる好意を示し、
重なる御挨拶を述べらるゝに對し余は深き感謝の念油然而生るを
禁じ得ず日佛兩國を結合する悦ぶべき親善の感
情は茲に新たに證明せられたる譯にして余
は深く之を感銘する者なり兩國の親交は國際關係設
定以來曾て一度も傷けられたる事なかりき日本が西洋諸國の諸技
術方法並に科學的進歩を採用するに當りて佛國の貢獻する所甚だ
大なるものあるは日本に於て決して忘れざる所なり佛國の著
作家科學者藝術家及び陸海軍兵士等凡て佛
國の勢力を世界に及ぼしたる先驅者の功に
就て吾人も夙に其の恵に浴することを得た
り特に遺憾のなきに佛國國民の示したる勇氣及び犧牲的精神を
見るに及び日本人は其の常に佛國民に對して抱ける敬愛と愛護と
の念を益強からしめたり余は佛國の幸ひか本日佛國及び其壯麗な
る首都を訪問するを得たり首都巴里の名は文明の象徴として全世
界に煥然たる光輝を放りその光榮の大なるは予深く感佩せり茲
に佛國著名の人士經世家と會するの機會を得るは予の特に欣幸と
する所なり是等の人々の知識と勇氣とは實に吾
等共同の勝利を確保して世界の平和を擡ぎ
なき基礎に置き明日余は記念すべき光輝ある歸途を巡る

國 際 問 題
三十日丑 特派員發

獨逸賠償方策

國民財産の二割徵集
勇 剛 鉦 木 巡 査
肩先きを打たれつ、
拔劍して逮捕す

犯人は昏垂

の之、同、二冊、一説と此、其の、あ、り、心、も、よ、の、
山、東、京、心

○清外也... 飲との... 東京の... 吾等... 十二

佛大統領御訪問

菊花大綬章御贈與... ミルラン氏答訪... 東宮首相閣員大使御歴訪

午餐會の席上

大統領の演説

佛國民の満足と感謝... 大統領の演説... 佛國民の満足と感謝

東宮の御答辭

東宮の御答辭... 東宮の御答辭... 東宮の御答辭

獨逸賠償方策

國民財産の二割徵集... 獨逸賠償方策... 國民財産の二割徵集

賠償金供託

賠償金供託... 賠償金供託... 賠償金供託

金貨金塊購入

金貨金塊購入... 金貨金塊購入... 金貨金塊購入

狂鮮人玄翁を 十六人を殺す

今曉東大久保の 加害者は市電の運轉 往來を荒れ

七名慘殺

今曉時分下東大久保一電氣局前、市電運轉手、朝鮮人李邦能(ニ)は同居人なる同車庫詰の運轉手遠藤五百次(三)の就中、鉗抜き付の金鎖にて一撃の下に打殺し、更に同居人妻(四)長男(五)次男(六)の一家四名を殺したる後附近なる同町一五六運轉手監督(七)連一一家をも塵殺する。この血痕滴る金鎖を擲へ屋外に飛出さんとするを物音に眼醒めたる李の女房(八)が止めんとしたるも、逆上せる李は「何ッ」と云ひさま手に持てる金鎖にて女房の頭部に一撃を加へ更に鋭利なる刃物を以て乳房を突刺し、同居人の顔を右折して、外に立出て同町八十番地角を左折し更に十三番地角を右折して、一三五番地田中置方前に差寄りたる際同所を泥酔して通り合せたる同町九三建具職(九)を毆打し重傷を負はせ、其前記今津方に赴き、熟睡し居れるを叩き起し完一(一〇)が戸を開くや否や物をも云はす一撃の下に同居人を打殺して、屋内に跳り込み意き逃げんとせる妻(一一)と格闘の末同居人を始め二男(一二)三男(一三)の四人を打殺し長男(一四)に重傷を負はせ、其前記の途跡を経て自宅に引返したり。

更に通行人を 滅多斬り

遂に逮捕さる

是より一、二兇行當時ならぬ音に驚き起出たる附近の人々等は、何事ならんと東京監獄の山崎看守長(一)阿部工藤(二)の監督責任を先頭に李邦能(三)を見たるに、同町一五〇番地(四)一家四名又左には李の妻が血に打倒れ家内血の海となり眼も當てられ、惨状に附近の人々等屋内に這入り得ず、佇み居たる捕房(五)より物運び形用して李が引返し來れるより附近の人々等は驚愕して屋内に逃込みたるが李に其儘自宅に入り女房(八)を再び息を吹き返したるを見るより血に狂ふたる李、又も肺部に一撃を喰はせ泣き叫ぶ李(九)李(一〇)の愛兒を獲て自宅を中へ早稲田に殺すものありと左に裏道傷ひに、投擲大(一)り、出で東大久保郵便局前に差寄りたる際前方より來れる會社(二)町四二加藤(三)を毆打重傷を負はせ更に二五〇番地(四)會社(五)町四二加藤(六)氏五男(七)か附近の東邊場に入浴し湯屋の前に出でたる利那李が打ちかゝりて左頸部に負傷せしめたるより實は、大に意き程近き自宅に逃げ込みたるに李は追跡し來りて同家に闖入し尙も打かゝらんとしたる際、實の(八)が確率ならんと店頭(九)立出たるに李は突然同居人に打つてかゝり左腕(一〇)左後頭部に重傷を負はせ同家を飛び出し、向坂舞大境内にて姓不詳の婦人一名及び早稲田(二)長濱(三)住所不明(四)等(五)其他各所に数名に危害を興へ半込若松町方面に赴く途、中野六郎(六)公同取調にて取押へられ早稲田署へ引取調中。

慘劇現場の大雑沓

臨検や見舞や彌次馬 被害者

夜の明け方から大久保の町中は大雑沓に散らばり、此方に人か

勇取な鈴木巡查

肩先きを打たれつ、 抜劍して逮捕す

血に狂ふ犯人を取押へんと若松町(一)邊の打撲傷を負はされたが同(二)交番の鈴木巡查(三)疾風の如く、逃走する勇取にも飛上り矢継ぎに抜劍し、李邦能(四)の跡を追う。走つたが、成感しなから格闘し島田(五)同町電車線路上で靴が滑つて、長外(六)二名の助により、犯人を捕らしたところを李は振返りさまを能く逃して早稲田署に引致し鈴木(七)の勳を以て巡查の肩先を毆打し二番は自宅を捜索中。

犯人は昏睡

早稲田署の留置場 覺醒を待つて取調

犯人李邦能は鈴木巡查に逮捕され、内務省(一)警視廳(二)早稲田署留置場に拘禁されて居る。朝正(三)力(四)刑事課長(五)現場に出張したが、彼に逮捕された後疲勞の爲め、小(六)東(七)長(八)中(九)村(一〇)部(一一)は現場(一二)に昏睡状態に陥つた爲め、同所では、後(一三)朝(一四)鮮(一五)語(一六)の通譯(一七)一名を呼び、犯人(一八)手當を加へて留置場内に安眠させ、取調(一九)を爲すべく正午(二〇)早稲田署(二一)であつた、一方(二二)東京地方裁判所(二三)に出頭した。

犯人は肺炎を起

し極度の衰弱

格闘の際全身に負傷 松井署長語る

犯人を逮捕した早稲田署の松井署長(一)年以來(二)警察に居るがこんな事件は(三)長は語る「李邦能は數回格闘を行(四)つた爲め(五)頭部(六)数ヶ所に負傷し殊に(七)右胸部(八)に受けた打撲傷のために(九)ある」

外大使然も其の姿を公然と見せしめ、其の
首の中、英の皇太子に格と老東言目と文の
あふ人あり、慶らうそやう立派と云ふと云ふ
實は其の人の風流より、思くも外人のものを
蔑如と云ふやあ、二十前後の若年にして

ぬふと印せんと思くも閑に後をも全部を腰言
 し老文庫に置くもの也と思ひまじ一冊と
 人に腰言を伝ふし一冊と自言せんとから
 朝も執事と如りする故紙のよるまは一
 冊とすし言しうるを傳ふこと又無聊を
 傳ふの一助也

五月三〇日

直入は竹田の養子に非ず

田能村 小 竹

『日本南畫史』や『大分縣勢要覽』
 (田島大機氏著)にも田能村直入を
 以て「竹田の養子」とか或は「養ふ
 て子と爲す」など記されてあれ共
 直入は曾祖父竹田の養子には非ら
 ず。

直入は曾祖父竹田門下四傑(高
 橋草坪、帆足杏雨、田能村直入、後
 藤碩田)の一人であるが、竹田の
 養子でも無く又畫法の後継者でも
 無い、世人は今尚直入を以て竹田
 の養子の如く思ひ居れ共、此誤り
 の生じたのは、初め直入は三宮傳
 太と言ひ、小虎と號し、後竹田か
 ら、名を痴字を願絶と貰つたが、
 其後故あつて破門されて居た、其
 破門が許されない内に竹田は歿し
 たのである、處が竹田の歿後直入
 は竹田の長男如仙(子の祖父)の許
 に來て破門を許して貰ひ度いと嘆

願したので、乃ち如仙は竹田の位
 牌の前で其の破門を取消したので
 ある。程經て、文人畫家の方では
 師匠の號の一字を貰ふとか、近く
 は荒木探令、平林探溟氏の如く一
 代狩野を許されて狩野姓を名乗る
 と云ふ類の如く、差支無くば田能
 村の姓を名乗らせて貰ひ度いと申
 込まれたので、破門を許した弟子
 の事であるから、如仙は之を許し
 たので、夫から三宮傳太は田能村
 と改姓すると共に、其出生地の郡
 名を取りて田能村直入と名乗り同
 時に竹田の事を先人々と稱へた
 のが誤りの原因である。で先人と
 僭稱する事だけは如仙が禁じたさ
 うだ。併し直入が田能村姓を冒し
 たのは胸に成竹あつての事であつ
 たらう竹田は此直入の性質を知つ

て居たので名を痴字を願絶と與へ
 たのであらう、竹田は寧ろ直入の
 爲に痴ならん事を欲して斯くは諷
 したものと思ふ。

〇今更の教養や、醍醐の村に在るに於てや、珍重と
見らるる五三粒の同志と嬉心入るるに二三と評
す

大正十年六月五日記す

一豊太閤真蹟日記

一冊

陶斎元公巻定

文化四年寶翰堂花散

陶斎夫公と雲州の味公と古今名花
類聚取揃書と曰じ原を亦不味公の
花散

一古謡百首

一冊

巻首

文禄三年二月廿九日於吉野書の作
今分書

とあり

大関も昌此は凡廿人各五首
軍に権大納言と曰ふるもの徳川
家原の哥と傳ふ

真跡を東山高其禪寺より
と系小寺殿より今も稀觀
の心也

一 瓜信帖

一帖

東寺沙門海寶の跋あり田舎(云々)の書也

秀次下望子浪息四枚の内一枚(上)

畢(天正十年四月九日)の跋修あり

此瓜信帖七片を括りし編也

一 黄葉和歌集

五卷全二冊

烏丸光廣の歌集

寛保三年校正の奥書あり京都出版也

一 西方陀羅尼為中金剛族河密哩多(軍叱利法)

此書是覺大(の)田仁(入)唐(の)年(の)よ(の)田(中)

伯不(お)唐(の)書(を)撰(り)校(正)活(版)也
附(く)し(て)もの大村(西)産(の)跋(あり)素林
ち(り)北(中)の(其)福(を)祈(る)に(之)印(施)
の本也

一 瑣談

二冊

五井景沙(隠)者(也)中井積善(の)序
跋(あり)明(和)の刊(也)旧時(多)く(坊)間(に)
ありし(也)る(ん)も(今)を(稀)也

○ 改(め)る(事)出(る)五(十)年(没)の(碑)額(板)を(と)
略(し)没(の)碑(額)二(あり)一(五)野(片)山(北)海(の)撰(文)
を(以)て(其)の(某)有(る)あり(也)の(五)葉(栗)山(の)跋(あり)

○山東家山の鈴木牧之と著くは馬問二冊約二百四十枚
 ありこの馬問後あらうところから板をとりしとて一本の言
 本を茶中にとりしとて重んぶとの形に配し上冊と下
 冊の二冊の田村に贈るをたし下冊をみづのり贈るを
 合せて十のりとし金戸もりたり、北の馬問を後み
 雪語と云ふ雪語編の序の行終に殊味を感じし
 ころとて北の馬問にこゑを配しとて思ひまじり
 同社に送るに馬問ちりし草紙のなる出来し
 をお千の四のり書けしに授し今も所々金戸の海
 海を著し給ふしめたり、馬問も二十一個不^推入の元
 あり川野のちりし馬問も各分三十のりを連載し
 又山陰行の物語を山陰家山家と見たり、記を七口

授ふと給ふしめたり、こゑの馬問の馬問の馬問の馬問
 北の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 は馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 をすしめたり、馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 との馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 分三冊又その馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 北冊の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 ころ中切の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 あり、馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 の自叙あり、山東の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問の馬問
 二月十二日

大砲の著
今次の偵察法は、又大砲の着
弾を測量すること、今これを飛行機の任務とするに
機上のもので、流るる標の、第一弾を放つた
行機の上で、其の距離を測り、無線電信にて、
どのくらいか、と、差回を、大抵、三か
目位、目的物、命令、中、又、塹壕に、潜んじ、
又、打撃の、今、の、砲、法、を、推し、之れを、秘す、
行機のみ、塹壕の上、定、一、砲、弾、や、爆、弾、を、
中、目、つけ、口、く、な、さ、ん、て、
飛行機が、能く、
こと、
と、
十二

を、
海、
も、
筋、
○、
に、
し、
架、
外、
上、
と、
鳴、

し新し日本を僅うも四十其位を以るゐるの比例に
あると外史又云く獨逸は屈服し此のを亞米利加
こそ新式の飛行機を盛んは元揚するとあつてハ
別居防ぎ切ぬぬ、此の飛行機は天上こそ爆撃
を扱ふと云ふも軍隊全滅すべしと云ふの屈服
し此と譯す、外史又外游中其かを述べる飛行機を
乗つて見れば感概を發つて云ふ十八人を載せる
機上の人と云ふは時と一言にせしむるも動搖
を感せぬ位であつた、然るも自ら元飛行機の
司令長として乗せられた機を地分危険を感せ
しめ此の時こそ直の角は急に日曲折を考つて
見せたりし此の心算を真に考へめ此の

外史の元飛行機を怪我とする率ハ其の人力
車に怪我をよるよりも稀にせしむるとその数
字を以て説くべし
○加茂正雄(ユウの侯士)と云く燃料問題と油を
して居るの如く隠のよるの、其の不足を日本
の石油を現在の消費より更に増減するの如く
後定して算するも、^三年におよぶと云ふに
ある、其の如く連年の消費は漸次増すと
いふ五十餘年経つては、^四倍に及ぶと云ふ、石油の
高率を石油を軍用に供するも、是れ一例として
日本は石油を輸出するガソリンを戦時主體
として用ゐるとするも、三の合して、^五倍と云

あまのうらこころ一筋を喫りて、加茂の燃料をエエノマ
イッテする方法を往々務めりて、中々思ひ出されしこ
ハ不炭を細末するも、火力を増すと云ふ一書あり
つれ、質の粗めを悪く炭の細末と云ふも用をお
すとも、能りの物炭を赤くし、且つ洗炭の結果
をも焼りて、不炭の不足を補ふと云ふ火力電
氣を用ゆるも一法あり、今後火力を充分利用
せんとすべしと、同家心全國を貫通する線を敷
設し、とこむ七水力を起す所を之れを核電として、
之を幹線と之れを工場と云ふことなすべし、水力
のある各所は、今も此も自れを起すべし、おもしろ
初めを伴はし、用をなすべし、水力の電化し、燃料

の代用をおすも云ふ、如何にも一策あり。

以上取原と云ふ十百大隈所：(一)をきき、茶
治原の上か、茶を起す人、二、三、四、五、六、七、
り、治原の自原、茶を起す、茶片を記
す。

六月十日記

○六月十日、村にお店と印語を編み、漢政編毛屋
山の輯らる所、回す。

江霞印影 二冊

と云ふ、昔者、高き、茶の文房、四用印の類を
おの、茶の店、屋山の印、数顆をぬき、多
く、茶の店、門下の、人の印、さう

後條三崎の所ありて序中「初め其の草京
河に印人をとりて海を必^しく^し東山宮
家と云ふ^るの^事ありて^し并^し傳^へる^る浪^の義
こ此處ありて^し印語を江霞印を^し題
當^りて^しと^し其言^ふ從^ふら^うと^しあり
ねある所の印の刻着余の未^だ知^らざるもの
多^し、た^らず^の此氏を叙^りて追^へて^し人
と^し據^こことを^しす

石樵中公世

遊舟木世甫。

九疑岳孔廟

傳舟曾志聖

漁石春松眉公

漁沙

石故前川名母。

樗亭子孫子穆

舟亭名和霞夫

新古古古爾

南江源松伯

笠瀨釋環中

可亭星道三

栢也森離玄

笠甚星氏子玉

廿保貞大彼承琢。

未松天太龍

澧水原子孟榮

春嶽鼎世寶

栢園長公祥

奉時肉以建

嘯月江波廣

関石岳湯臣

西渠西子氏

春溪森伴克

麟西井授龍

探芳菴子彤

蓬堂就鳥子嶺

垂裕段伯比

彌南江馬夫

金波源梅教

元泉村世濟

松軒山孟昭

茶園川茶桐

石隠牧君羊

此外に芙蓉屋山首尾にあり

(流石を也) 印人計 三十四人

此山渡世定茶桐に梅峯の點致を載す
概して流石の也予、印簿中此者闕
如す、予、知價二十圓也

○鈴木牧之の家には花より馬琴の曲筒一冊此紙
所載を以て傍流、其首の二箇を拾ふ、雪海
に於て初めを引流の事を云ふ、又改元毎二月
あるのり、前、北條流石の記の流石、茶山
と此紙雪海のこと、一箇し、於十圓(連)載の流石

を流石とあり、流石のしめし、此の二箇を石の流石
の終尾に載す、其の事、こゝに、一箇に、流石を
雪海に關する事、全文を、抄すとす

大正十年六月十日の事

東京市赤坂區青山町
電話二八八四
掛電五二七四

替立處分の
極上
情セル
七圓五十錢

曲木部

大評判
悔恨の女
富士ヶ根
清水橋村
渡邊霞亭

小役員
川眼鏡店
株式で成功

新日本書及俳畫講義録

限る候も早速の事をお納め宜之田中記有る事
三日前早速筆獨志候に而し等節志候
し早速の事見ても内容微せん志候も同意
せん也。由宜を一切おめよ其き字換を任
せ果せんが悔辱を一時着せり如き事姑息の
ことよりも信者の面目を潰す七後の禍を
召くの源もろし一考すべき事也先角毎
協説の行つてしと止むを得する事也。此等
毎協説を今より一ヶ月前にしてある事ハと兼し
この説を行はしこと、さうなる也 十分記

○開し候も馬記等より終末後三、其く等馬記集

馬記の牧之に其の事馬記の約なる故界紙綴本を冊大
略後又改りて老翁と題ふ不抄録す全部言し
つじまき此もその事馬記の問もさう氣の振らりし
と馬記の中教乞の肉飽りの体柄もも一〇ウニ
ツチもさうし 牧之の書我中何の報する
序に益商人とありし事を馬記の益を
おしりうし其れを去る事とさふと解し
うたわあるへき事とさふと益も地もさう
ことをゆきし 其もせし事とさふと
紙後の塩引を牧之の記に塩出し
をせば生難をゆふの致あると書り
し等馬記料記を心ゆさる事一気すべし

下谷道の歴々の臺園つらあう、まをむのおみろそ自
畫美人のすうおに馬琴うに終るを終るそなる、
馬琴も其使を幼れをちこ終るも亦きそら
と千紙のてしはあう、終る意のゆめに美あ
二人まら宗おに梅えあう、終るの句を

えらわをそ子のまきちまの紙は四代り

梅一輪宗のひとひひや壽陽粧 馬琴

馬琴のむ状中海邊華山に美人を亦もま
馬の質いと牧之に送るの條あうと名終本也
危するやをがあう

華山とそ夜終るま 梓の門のここのは
氣心つにこ云同故さま花のたの娘二丁

か入作雪終るはたにうつせつせつせり

この女おせり

らとてあう

里田言終るとま送るのうらあう牧之こよ人、若
天食并を馬琴うにせし馬あ一漢其の
よ力を終るはる一節あう、此人の若く六院
布考あう余つのかうやう

馬琴も雪陽の材料に錦城の雪をそら
る雪つ干のうらに味を味しなるらう
んを垂しと滴くはをそらと牧之に
ふ終る、牧之錦城方面のうらを
あうぬうしをそらひらうと免しく馬あ

紙後名高に梅り云りす。馬あを其の序に
紙後名高の若者なり。雪の深のうらさる地の人
う一向の雪のうらと記す。雪のうらと不道せ
満りしそなり。紙後名高に珍なり。雪の
うらと特にむらぬとそなり。雪のうらと不道せ
う

馬あ京山に付し云りす。一の節なり。

京山子と七年す。雪の深のうらさる地の人
の氣あ高し。雪の深のうらさる地の人
や。彼に世オ。雪の深のうらさる地の人
し。人を袂りせ。雪の深のうらさる地の人
し。雪の深のうらさる地の人

とあ。もまぶ。ちよと。とり。分せ。貴。見
、雪の深のうらさる地の人
る。雪の深のうらさる地の人
て。

え京山。雪の深のうらさる地の人
馬あ京山に付し。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二

以下全て
白紙

